

つくばね vol.28no.3

目次

- 1 図書館情報学図書館について
- 4 自著を語る
- 6 図書館情報大学実習生 実習体験記
- 7 本学教官寄贈著書紹介
- 8 私の一冊
- 9 Ask Us としょかんミニガイド
- 12 とびつくす
- 13 掲示板

図書館情報学図書館について

寺田 光孝

図書館情報大学附属図書館は、統合により筑波大学附属図書館図書館情報学図書館となった。文字通り図書館情報学の専門図書館である。

この図書館は、昭和54年10月図書館情報大学の創設とともに附属図書館として昭和55年5月、教室の仮室で出発し、研究棟が完成した翌年、研究棟と講義棟を結ぶ位置の現在の場所です。本格的に開館を見た。小さな大学の小さな図書館であったという事情にもよるが、研究室に、また教室に直結した場所に図書館をとというのが理念でもあった。

設立時の第一次資料整備計画では10万冊を目標に、最終的には20万冊を目標に蔵書構築が始まった。昭和56年3月に図書館短期大学図書室の蔵書約3万3千冊の移管を受け、毎年約7～8千冊の増加で成長し、平成12年度に目標数値に達し、今時の統合時には約21万冊の規模となっている。

1 図情図書館の機能

図情図書館の機能について、若干歴史的経緯に触れつつ、先ず述べてみよう。この図書館は学部



プリントメディア部門のある建物外観



情報メディアユニオン全景

デジタルメディア部門は1,2階

学生・研究者を対象とする通常の図書館機能のほかに、図書館情報学の実験演習の場としても位置づけられて出発した。演習室・実習室が図書館の管轄下に置かれ、目録・分類、レファレンスサービスの演習に使用されてきた。また図書館情報大学は筑波大学と同じく「開かれた大学」を建学の精神とし、昭和56年度以来、文部省（現文部科学省）委嘱の夏期の司書講習、文部省共催の大学図書館職員長期研修が毎年開催され、さらに平成9年度以降文部省委嘱の学校図書館司書教諭講習、平成10年度からは文部省・日本図書館協会共催の新任図書館長研修が行われている。大学図書館職員の長期研修、司書教諭講習が図書館の所掌である。

当館の開館当初には特殊施設として図書館情報システム開発センター、メディア機器センターが付置され、システム開発センターでは図書館業務機械化システムLIAISONを開発し、機器センターでは資料のマイクロ化などに当たっていたが、平成3年に両センターが統合し、省令施設「総合情報処理センター」となった。平成8年にセンターの新棟が完成し、10年にデジタル図書館システムが導入され、翌年に稼働するようになった。デジタル図書館では図書館情報学と情報メディア研究の分野のメタデータを作成し提供している。この間、平成4年マルチメディアネットワークシステムBIBLIONによるOPACの公開や学術情報センターのILLシステムも運用を開始している。

特殊施設にもう一つ公開図書室があった。当時の谷田部町、桜村には住民のための図書館がなかったからである。火・木・土の午後開室のみであったが、成人用と児童室があり、特に土曜の午後は盛況であった。この図書室はまだボランティアによる運営がそれほど一般的でなかった頃、学生と地域住民のボランティアで運営された。つくば市の誕生と市立図書館の開設でこの図書室は平成2年12月に閉室となるが、児童部門のみは演習の場として機能しつづけた。

平成13年に情報メディアユニオンULISの新棟竣工により、図書館はデジタルメディアの利用、

電子情報の作成・編集等の機能を中心とした「デジタルメディア部門」と旧来の図書館を「プリントメディア部門」とした2つの部門に分かれた。デジタル図書館については、統合とともに「知的コミュニティ基盤研究センター」が生まれて、こちらに移ったが、今後図書館との緊密な連携で運用されることになる。

2 資料整備計画と大型コレクション

今日の図書館はストックとしての情報を収集し利用するのみでなく、大量のデータベース、ネットワーク上のフローの情報をも扱わざるをえないが、図書館の主機能はストックの情報を集積する場であることに変わりがない。当館では、開学時の第1次資料整備計画に加え、昭和62年度からの第2次資料整備計画、そして平成9年度から第3次資料整備計画（進行中）と3次にわたる予算措置の結果、全国の図書館情報学の拠点図書館として専門書の収集を着々と図ってきた。さらに、文部省の大型コレクションによる予算措置も度々認められてきた。「NTIS研究レポート：図書館情報学篇 1968 - 1976」（昭和55年度）、「ロシア・ソ連書誌、図書館学資料集成」（56年度）、「図書館情報学関係学位論文集成 1938 - 81」（57年度）、「英国図書館研究開発部レポート集成 1965 - 1983」（58年度）、「印刷・製本・出版関係コレクション 1764 - 1982」（59年度）、「百万塔陀羅尼（自心印）」（60年度）、「図書館情報学関係学位論文集成 1981 - 85」（61年度）、「シカゴ大学図書館情報学関係学位論文集成 1931 - 1990」（平成3年度）、「図書館情報学関係学位論文集成 1986 - 1990」（3年度）、「同 1991 - 94」（7年度）、「同 1995 - 98」（12年度）である。アメリカの学位論文については1998年まですべて網羅されている。平成13年度にはバンクックの『系統的百科全書』（全200冊）も認められた。

雑誌は、図書館情報学関係の雑誌を網羅的に受け入れる方針で始まったが、バブル崩壊後見直し作業がつづいた。継続購入受け入れタイトル数の変化がこのことを語っている。洋雑誌の場合、昭

和57年度の480種であったものが昭和61年度には337種に絞り込まれ、平成12年度には306種にまで落ちている。書誌関係の雑誌がCD-ROMなどに媒体変換したことも一因であるが、それ以上に財政事情によるところが大きい。電子ジャーナルの出現などから、統合を契機に、今後も見直し作業は避けられないところである。

3 特殊コレクションと貴重書

大型コレクションを除くと特殊コレクションはそう多くない。目録法関係の「高橋泰四郎旧蔵文庫」と書誌学・言語学関係などの「笠木文庫」の2つである。いずれも図書館講習所時代の修了生の旧蔵のものである。単著では加藤宗厚の手沢本やランガナタンのサイン入り本がある。今年になって大学図書館行政関係の馬場重徳文書も入った。

当館が誇る蔵書の最大の特徴は百科事典類の集書である。Ephraim Chambersの『サイクロペディア』（初版、7版、7版補遺）、『ブリタニカ』は初版から第15版まで、すべて揃っている。Morériの『歴史事典』の最終版（1759）、Bayleの『歴史批判事典』（第3版と英語版）、『トレヴーの百科事典』（1771の最終版）、Diderot et D'Alembertの『百科全書』（全35巻）、Panckouckeの『系統的百科全書』（この事典の全巻所蔵は当館が本邦で唯一である）、ラルースの『19世紀大百科事典』と『20世紀大百科事典』、Augéの『新ラルース挿絵入り事典』など、またFuretièreの『万有事典』の復刻版などを入れると、まさに百科事典の宝庫であると云えよう。

書誌類もまた充実している。網羅的にはほど遠いが、C. Gesnerの『世界文庫』の復刻やDe Bureの『教養書目』のオリジナルなどを含め、図書館目録や販売書誌まで書誌類の蔵書の層は厚い。

単著では、ゲーテンベルク聖書の「エゼキエル書」の一葉やインクナーブラの1冊などメディア媒体・印刷・文字に関するものなどサンプル例として数多くのものが収集されている。特に和書・漢籍の場合はこの例が多い。17世紀の初期雑

誌もこの例であるが、“Journal des sçavans”，1666 - 1722 .はオリジナルで、“Acta eruditorum”，1682 - 1776 .もマイクロフィッシュで入っている。

情報メディアユニオンの新棟の完成によって、デジタルメディアを使用するスペースであるマルチメディアプラザ、メディアミュージアム（展示コーナー）と貴重書庫並びに演習に使える貴重書閲覧室ができた。貴重書は蔵書の核であり、図書森の巨木に喩えられよう。この蔵書の核を作るために、貴重書購入の予算枠の仕組みを3年前からつくったが、この方針は堅持したいものである。

（てらだ・みつたか 図書館情報学系教授）



『文献足徴』[扁額は図書館情報学図書館で保存]（今澤慈海の揮毫による前身校図書室に掲げられていた扁額。氏は戦前の日比谷図書館黄金期の館頭、戦後は成田図書館長として活躍した代表的な図書館人である。文部省図書館員教習所の設立功労者の一人であり、長年講師を勤めた。）



自著を語る

『政治と哲学： ハイデガーとナチズム 論争史の一決算』
上巻&下巻，岩波書店，2002年
中田 光雄

ハイデガーの名は哲学分野以外でも御存じの方は多いだろう。1889年に南独で生まれ、近くの著名大学フライブルクで新旧哲学界の両雄リッケルトとフッサールに師事し、ついで北部マールブルク大学の教壇でその独創的な哲学と独特の名講義によって多くの学生を魅了し、その成果である『存在と時間』（1927年）によって哲学史をいわば反転させ、フライブルク大学に戻ってからは1933年、ナチス政権成立とともに学長となって「政権協力」のかたちをとり、やがて省庁との意見の確執によって辞任し、以後、ナチス官憲監視のもとでこれまた多大の学生を擁する講義を続け、戦後は逆に英米占領軍から一時公職追放となるが、1950年代から特にフランスでその哲学者としての声価が急騰し、世界的に有名となった。しかし、たんに有名になっただけではなく、また実はたんにこの頃から有名になったのでもない。師のリッケルトとフッサールが各々別のかたちではあれ依然として帰属していた近代の認識論的哲学、つまりデカルトから始まる「私は考える、ゆえに私は存在する」の「私は考える」に力点を置く哲学から、「私は存在する」に力点を移し、哲学のそもそもの出発点である古代ギリシャの存在論を新たなかたちで20世紀に復活させるこの「存在論的転回」によって、今日の「現代哲学」の思考地平を決定的に開き、すでに1930年代からフランスを中心とする若い世代の哲学者たちの共感を得はじめ、哲学以外のさまざまな学的領域にもつぎつぎに発想の転換を出来させ、この哲学としての時代を開關する独創力と広範な影響力によって、われわれの知る「ハイデガー」の名は裏打ちされている。

だが、世界大に名声が高まるにつれて、戦中の「対ナチス協力」も取り沙汰されるようになった。実のところ、当時のドイツ大学人はいわゆる国家公務員であり、原理的に反ナチ体制主義者は存在



するはずもなく、実際、積極的な支持者も多く、哲学正教授のみに限ってみても、全ドイツ23大学の正教授180名のうち、1933年時点での入党者は約30名であるが、1937年以降は終戦まで約半数90名が正式の党員であり、ハイデガーのケースは特に例外的なものではない。にもかかわらず、ハイデガーの場合のみが特に取り沙汰されるのは、むしろその哲学者としての世界的名声、さらにはその哲学の世界的な影響力、つまりたんなるドイツ問題に密閉しえない、そのほかならぬメリットゆえと見なければならぬ。

この「ハイデガーとナチズム」問題は、我が国では1987年のフランスでのベストセラーの余波を承けて87～88年に論題となったが、すくなくとも表面上は一過的なものに止まった。しかし、われわれより若い世代の特に西欧思想研究者にはこの種の問題は重く受け留められるようになってきており、翻って世界の論壇・研究界をみれば、これはなんと1930年から今日まで70年以上、多少の起伏はあれ、世界的に著名な思想家たちの大部分をも巻き込んでの、延々たる考察と論争の連続である。20世紀を代表する哲学思想と、これまた20世紀を代表する未曾有の政治・軍事スキャンダルの相関ということになれば、巨大な文明の転換期としての現代を生きる広義の思索人の意識に、この問題にどう対処するかは一個の不可避の試金石と

して突き付けられてくること必須であるから、これも当然といわなければならない。

ここに紹介・解題の機会を与えられた拙著は、もともと87年事態への対応のために発意され、結局、この過去70年の論争史の全体を総括・補填・刷新し、正道に定位させる試みとして成ったものである。論の主題は「ハイデガーとナチズム」に焦点を絞っているが、真意においては二十世紀論、二十世紀がその典型的な表出のひとつである世界史と文明史の動向への問いといってもよい。十年を超える思考を3800枚の文言によって造形したこの著を簡単に要約することはむろんでできないが、ポイントはとりあえず三点ある。(1) これまでの関係諸論稿を適宜恣意的に取捨選択可能な資料として軽んずることなく、二十世紀の中軸を構成する重要な人間思惟の葛藤のコングロマリットつまり論争史として主題化すること。本著はその基礎作業として論争史を構成する主に独・仏・米・英の大小ほぼ全ての三百余論稿を逐一入念に検討する策を採った。このことはたんに研究作業の拙劣さを露呈しているだけのことのように見えるかもしれないが、二十世紀というこの苛烈な悲劇性を帯びた雄渾な叙事詩をその近代から脱皮して未知の未来へと向かう自己審問の精神性において然るべく把握しなおすためには、不可欠の手續きである。(2) ハイデガー哲学がそれと自覚して存在論や存在思惟である以上、存在概念を可能なかぎり明確にし、それによってハイデガー思惟を構成する全ての主要要素を相互連関的に体系化しつつ、当面の問題を含む全ての問題にアプローチすること。不思議なことにこれまでの関係論稿のほとんどすべてが、この肝心の視角設定を行なっていない。たしかに、ハイデガー自身が、「存在とは何か？」(Was ist das Sein?)と問うてその「何」(Was)の確定をもって回答としてきた従来の哲学を形而上学の虚妄の名のもとに棄却し、「存在とは何か？」の問いそのものから零れ落ちる《ist》から出発して《Sein = Was》なる回答なき問いの無尽性へと哲学を引き込み、挙げ句の果ては哲学そのものをも棄却する以上、存在概念の八

イデガー的規定は原理的に可能ではない。しかし、ハイデガーの60年にわたる「存在への問い」がその存在概念の明確化をめぐる従来諸哲学よりいかなる進展も示していないとは断言しうるはずもなく、いずれにせよこの存在概念の深みからこそ目下の問題の真意も照射されなければならない。(3) 本著は、こうして、(2)から出発してハイデガー哲学テキストを構築し直し、その政治テキストを一字一句読み解き直し、論争史上のほぼ全ての論稿をも換骨奪胎(?)組み建て直し、ハイデガー思惟と、「ハイデガーとナチズム」問題と、「ハイデガーとナチズム」論争史全体を、古代ギリシャ以来の「政治と哲学」問題系と、やや大仰に言えば約一千万年前に無から存在へと立ち出で、いま改めて種としての無の可能性を前にして存在の脱皮をはかるわれわれ人類の、現在から未来への文明史・世界史の只中に位置づける。具体的には如何ようにか? 上記の通り、簡単に応えるわけにはいかない。ただ、礼儀上、大学同僚としての常識の言葉でこうってみることはできる。ハイデガーはナチズムの名においてドイツ・ナショナリズムに「加担」した。ナチズムもまたドイツ・ナショナリズムから生まれ出て、しかしそれを篡奪・奇形化した。ハイデガー思惟がナチズム崩壊後も生き延びて、むしろ逆に大成するのは、旧来の「永遠と普遍」の哲学に抗して「時間と歴史的固有」に賭けたこの存在思惟が、そのドイツ・ナショナリズムの底を脱開してたんなる世界(Welt)ならぬ新たな「世・開」(Welten)への方途(Weg)を孕んでいるからであると。...自分で言うのはどうかと思うが、「しらふ」で言っておけば、本著は世界的レヴェルの力作である。少なくとも、論争史に対する一つの立派な《japanese contribution》である。世評が同じことを言うかどうかは知らない。われわれは自らの渾身の労作をとりあえず具眼の士たちに献ずれば、それでよい。

本学中央図書館には資料渉猟その他で多大の御援助を賜った。感謝に堪えない。

(なかた・みつお 現代語・現代文化学系教授)



図書館情報大学実習生 実習体験記

今年は、9月2日(月)~20日(金)の3週間、図書館情報大学の学生10名が中央図書館で、図書館情報学の実習をしました。

中野 倫靖

筑波大学附属図書館での実習では、カウンター業務・レファレンス業務・相互貸借業務といった、いわゆる図書館の表向きのサービスを主に体験させていただき、多くのことを学びました。大学の講義では、図書館でのこれらのサービスについて学んできたのですが、実際にカウンターに立った時にはその時の知識がなかなか出てきません。例えば、大学の講義でレファレンスサービスに関するものがあり、そこで様々なツールの使い方を習いましたが、実際の質問には、回答をその場で思いつく必要があり、これは経験がモノをいいます。

また、図書館の裏の作業とも言えるサービスも体験させていただきました。セルフリーディング・不明本調査・督促業務などがこれにあたります。この中でも特にセルフリーディングと不明本の調査は、図書館自体が巨大であり、蔵書数も非常に多いため、体力・気力の勝負となります。実際に経験し、その大変さ、重要さについての感覚的な知識を得ることができました。

図書館でのボランティアの見学も非常にためになりました。特に、対面朗読のボランティアの見学は大変良い経験でした。

本実習を通して、図書館というものが以前より分かってきました。ありがとうございました。

(なかの・ともやす 図書館情報学科4年)

宮本 麻衣子

今回の実習では主に目録業務に携わりました。目録業務はカウンター業務やレファレンス業務とは異なり、利用者に直接サービスを提供する業務

ではありません。しかし、目録作成時には利用者が図書を探しやすいように、分類番号を付与し、図書の整備を行うなど間接的サービス提供を体験することができました。今まで私が利用者として目にしてきたサービスは、図書館で行われているサービスの中でほんの一部であることを実感しました。

また、実際の図書館の目録は、大学での演習で作成した学習用目録とは比較できないほど慎重に作成しなければならないことも、作成された目録を多く目にし、自分で新たに作成することで理解することができました。

実習全体を振り返ると、大学で学んだことを単独で、もしくは合わせて活かせる場面もあり、限られた3週間で充実して過ごすことができました。また、図書館で働きたいという思いは一層強くなりました。しかし、職場としての図書館では授業で与えられた知識だけでは不十分なことも実感し、より深い理解を得るために自ら能動的に取り組む必要性を感じました。今回の実習は自分の学習を振り返る良い機会であったと思います。

このような機会を与えてくださった筑波大学附属図書館の皆様には深く感謝しています。

(みやもと・まいこ 図書館情報学科3年)

星 麻佑美

今回の図書館情報学実習において、私は雑誌コースを担当させていただきました。

雑誌と言いましてもさまざまな種類があり、それを実装し、種類や用途、配架場所別に区分けする作業は、想像以上に大変なものでした。

特に筑波大学附属図書館には今まで私が利用してきた図書館とは比べ物にならないほどの雑誌が毎日のように配送されてきます。それに加えて、いろいろな団体からの寄贈雑誌の受け入れや、バックナンバーの取り寄せなど、仕事の種類も多種

多様で、毎日いろいろな作業を体験させていただきました。

少し残念だったのは、毎日大量の雑誌と向き合うばかりで、利用者の方との交流が出来なかったことです。しかし、利用者と同じような目に見える場所だけが、図書館職員の現場ではない、という事を知りました。指導していただいた職員の方がおっしゃった「縁の下の力持ち部署」とい

う言葉に、このように利用者から見えないところにも、たくさんの職員がいて、そんな方たちが図書館を支えているのだな、と感じました。

最後になりましたが、このような貴重な体験をさせていただきました、雑誌受入、雑誌サービス両係の皆様にお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

(ほし・まゆみ 図書館情報学科3年)

本学教官寄贈著書紹介

平成14年7月～9月に寄贈を受けた本学教官の著書を紹介します。

(敬称略、寄贈者五十音順、所属は平成14年度のもので、〔 〕内は配架場所と配架番号です。)

石井健一 (社会工学系)

- ・日本、韓国における社会・文化の相互影響の調査研究 / 小針進, 渡辺聡共著. 2002
[中央 361.5-Ko27]
- ・インターネットの利用動向に関する実態調査報告書 2000 / 久保田文人 [ほか] 共著. 通信総合研究所, 2001 [中央 007.56-I57]
- ・インターネットの利用動向に関する実態調査報告書 2001 / 久保田文人 [ほか] 共著. 通信総合研究所, 2002
[中央 007.56-I57-2001]

稲垣泰一 (文芸・言語学系)

- ・今昔物語集 3 / 馬淵和夫, 国東文麿共校注・訳. 小学館, 2002 (新編日本古典文学全集: 37) [中央 918-N77-37]
- ・今昔物語集 4 / 馬淵和夫, 国東文麿共校注・訳. 小学館, 2002 (新編日本古典文学全集: 38) [中央 918-N77-38]

掛谷英紀 (機能工学系)

- ・日本の「リベラル」: 自由を謳い自由を脅かす勢力. 新風舎, 2002 (Shinpu books)
[中央 302.1-Ka24]

勝田 茂 (名誉教授)

- ・科学の目で見たテニスレッスン / 蝶間利男, 佐藤政廣共著. ベースボール・マガジン社, 2000 [体芸, 図情 783.5-C53]

加藤行夫 (文芸・言語学系)

- ・悲劇とは何か. 研究社, 2002
[中央 901.2-Ka86]

河野惟隆 (社会科学系)

- ・法人税法減価償却の新解釈. 税務経理協会, 2002 [中央 345.3-Ko76]

徳田克己 (心身障害学系)

- ・ホームヘルパーのための障害者ケアハンドブック: 障害者を正しく理解し、支援するために. 日本医療企画, 2002 (ホームヘルパー現任研修テキストシリーズ; 7)
[中央 369.2-H83-7]

松本 宏 (応用生物化学系)

- ・Herbicide Classes in Development: Mode of Action, Targets, Genetic Engineering, Chemistry / edited by Peter Böger, K, Wakabayashi, Springer, 2002
[中央 615.87-B62]

本橋信義 (数学系)

- ・数学と新しい論理: 数学的帰納法をめぐる. 遊星社 / 星雲社 (発売), 2002
[中央 410.96-Mo83]

森田 孟，鷺津浩子（文芸・言語学系）

・アメリカ文学とテクノロジー．筑波大学アメリカ文学会，2002

[中央本学，中央 939.02-W44]

守屋正彦（芸術学系）

・定本・武田信玄：21世紀の戦国大名論 / 萩原三雄，笹本正治編．高志書院，2002

[中央 210.47-Ta59]

古田博司（社会科学系）

・韓国学のすべて / 小倉紀藏共編．新書館，2002 [中央 302.21-F94]

若林幹夫（社会科学系）

・漱石のリアル：測量としての文学．紀伊國屋書店，2002 [中央 910.268-N58]



私の一冊

古田 博司 編

『韓国学のすべて』

（新書館）



「韓国学」とは，韓国朝鮮に関する人文・社会科学的研究を通称する用語で，この書はその政治・行政，経済，歴史，社会，思想・宗教，文化，北朝鮮関連，日韓関係，の各分野について，15人の執筆者たちによって書かれています。彼らのほとんどは1960年以降生まれの若手ばかりで，新世紀にふさわしいグローバル化時代の陣容となっているのも特徴的です。

このようなハンドブックは企画力が勝負ですが，現在と歴史がバランスよく，しかも最近の情報を網羅しており，学問的な水準を保ちつつ，とてもわかりやすい内容になっているのがお勧めの点でしょうか。

例えば，序では韓国に限らず東アジア全体に当てはまる議論を扱っており，本書の広いパースペ

クティブを示すと同時に，経済では研究史の流れを追いつつ，開発経済の問題点にも触れ，社会ではジェンダー研究から観光社会学まで幅広く，文化では古典文化から現代の大衆文化まで，堰を切ったように若手たちの煌めく才能があふれ出しています。

各項目とも過不足ない研究レビューであると同時に，筆者それぞれの持ち味が生かされており，韓国朝鮮研究の新地平を開くものとして大いに期待されています。

また，事項の間に興味深いコラムが盛り込まれ，「なぜ韓国でキリスト教が普及したのか」とか「韓国のいじめは日本とどう違うのか」とか「韓国の博士号は濫発されているか」など，肩のこらない，しかし有意義な知識が，楽しみながら得られるような工夫もなされています。

本書は，本年5月の発売以来，既に半年で4000部近くを売り切りました。各界の人々から評価と賞賛をもって迎えられ，一層の普及が期待される韓国朝鮮研究の良書と目されています。

（ふるた・ひろし 社会科学系教授）



ASK US としょかんミニガイド

図書館情報学図書館について

10月1日に筑波大学と図書館情報大学が統合し、これまでの図書館情報大学附属図書館は、新しく筑波大学附属図書館の一専門図書館としてサービスを行うことになりました。

今回のASK USでは、この図書館情報学図書館について詳しくお知らせしたいと思います。

利用にあたって

他の筑波大学附属図書館と同様に、図書館を利用するためには利用証が必要です。利用証(学生証・身分証明書など)を必ず持参してください。

所在地

図書館は筑波大学春日キャンパス内にあります。春日キャンパスは、学園北大通りと学園西

大通りが交わる西の角、東京家政学院筑波女子大学の向かいにあります。

10月から学内バスの停留所ができ(図書館情報専門学群)学内の行き来が便利になりました。

開館時間

月～金 9:00～22:00
(9:00～17:00)
土・日・祝休日 13:00～18:00
(休館)

- * ()内は春季・夏季休業期間中の時間です。
- * 司書講習期間中は変更することがあります。

休館日

春季・夏季休業中の土・日曜日・国民の祝休日
年末年始(12月27日～1月5日)

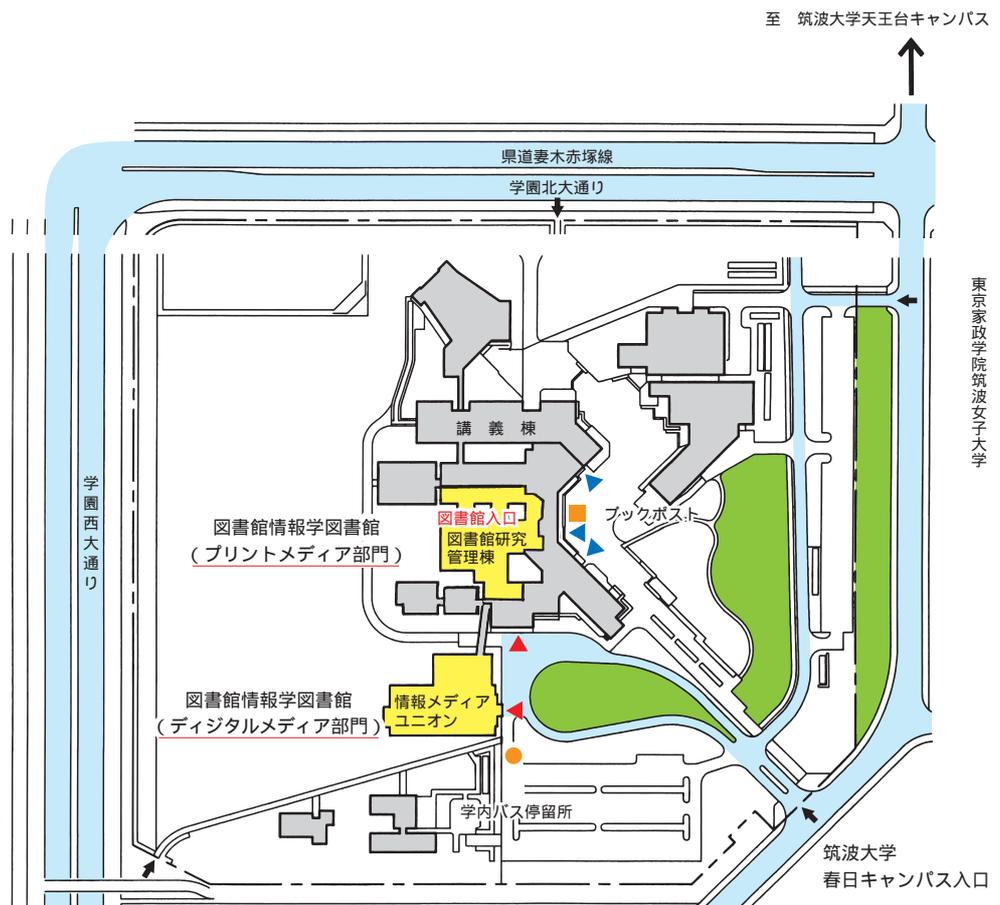
- * 臨時に休館する場合は、あらかじめ掲示などでお知らせします。



拡大案内図



建物入口 ▲ 平日・土・日・祝休日用
▶ 平日用



* 春季休業期間など、今年度は他の図書館と異なる部分がありますので、附属図書館ホームページの開館日カレンダーをご確認ください。

図書館案内

図書館情報学図書館は、紙媒体を中心とする「プリントメディア部門」と電子情報媒体を中心とする「デジタルメディア部門」とで構成されています。

<プリントメディア部門>

図書館情報学図書館プリントメディア部門は、春日キャンパス中心部にある図書館研究管理棟と講義棟の間に、2階建て建築物として設置されています。図書館として独立した建物はありませんので、まず図書館のある建物(図書館研究管理棟)に正面玄関などから入り、廊下を歩いて中に入ると、図書館入口にたどりつくこととなります(他にもいくつかの入口があります。前頁の案内図をご覧ください)。



プリントメディア部門入口より

入館方法

入口のドアを開けて中に入ると、正面に入館ゲートがあります。利用証(学生証・身分証明書など)のバーコードの部分に赤いランプにかざして、入館してください。

<1階>

1階には図書館情報学関係図書(一般図書と参考図書を一緒に配架)、雑誌(新着雑誌書架、雑誌バックナンバー書架(固定 前年分から過去10年分)、集密書架(過去11年分以前)の3ヶ所に分かれています)、百科事典、抄録索引誌、学生

用指定図書、新着図書などが配架されています。

図書館情報学図書館は図書館情報学に関する専門的な図書館として機能しており、図書館情報学関係の蔵書が充実しています。

ブラウジングコーナー

入口を入ってすぐ右手の部分がブラウジングコーナーです。ここには新聞の他、教養雑誌、出版雑誌などが配架されています。

カウンター

入館ゲートを入って左手にカウンターがあります。こちらでは、図書の貸出・返却及び文献複写受付、レファレンス業務などを行っています。何かわからないことなどがありましたら、何でもお気軽におたずねください。

OPACコーナー

カウンターの脇にOPACコーナーがあります。こちらには端末が6台設置されていて、図書館の蔵書の検索などができるようになっています。また、こちらには各種申込用紙を備え付けてあります。図書館情報学図書館の蔵書は、OPACの所在表示が詳しく表示されるのが特徴です(「図情1閲覧」「図情児童」など)。資料を探す際には、所在と請求記号の両方をご確認ください。

複写機

OPACコーナーの脇に複写機があります(私費用1枚10円)。ご利用の際は、文献複写申込書に記入してカウンターに提出してください。なお、両替機がありませんので小銭をご用意ください。

閲覧室Ⅱ

この部屋には図書館情報大学で平成2年12月まで運営していた公開図書室の蔵書を引き継いだもの(大学図書館では普通購入しない比較的軽めの読み物などがあります)及び、新聞縮刷版、叢書・全集、新書類が配架されています。

児童図書室

この部屋には公開図書室から引き継いだ約12,000冊の児童図書が配架されています。貸出も可能です。

<2階>

2階には図書館情報学以外の図書が配架されて

います（一般図書と参考図書を分けて配架）。

プリントメディア部門については図情資料サービス係（内線 8・1232（カウンター）、8・1210）までお問い合わせください。

< デジタルメディア部門 >

学内バスの図書館情報専門学群停留所で降りると、目の前に前面ガラスの真新しい建物があります。この情報メディアユニオン棟（Union of Library and Information-Media Studios, 愛称：ULIS）の1階と2階の半分が図書館情報学図書館デジタルメディア部門で、次のような施設で構成されています。



マルチメディアプラザ

< 1階 >

マルチメディアプラザ

外から見える、パソコンがたくさん設置された明るいフロアです。ここでは附属図書館が所蔵しているCD-ROMなどの電子資料やビデオなどの視聴覚資料が利用できます。また、インターネット上の情報を調べることもできます。資料を利用する際は備付の申込書に記入をお願いします。なお、プラザの資料はICチップで管理されており、無断で持ち出すことはできません。

なお、プラザには車椅子対応のデスクと、画面を見ながらノートをとったりしやすい、ディスプレイが天板の中に埋め込まれたデスクが各3席ありますのでご利用ください。

メディアミュージアム

メディアプラザに隣接した展示コーナーです。常設展示「記録メディアの発達と図書館の変貌」

では、メソポタミアの粘土板から印刷術の発明をへて電子媒体にいたるメディアの発達と、図書館の歴史をたどることができます。このコーナーには入退館管理装置が置かれていますが、これは体芸図書館に1975年3月に設置された日本第1号機です。

貴重書庫・貴重書閲覧室

百万塔陀羅尼やケルムスコット・プレス版The Well at the World's Endなど、図書館情報学図書館で所蔵する貴重書が収められています。

貴重書の閲覧については図情資料サービス係までお問い合わせください。

< 2階 >

図書館情報学リカレント教育ホール（メディアホール）

108席の多目的ホールです。3面の大型スクリーンがあり、衛星通信大学間ネットワークシステム（SCS）の設備も備えています。また、すべての座席には高速ネットワーク用情報コンセントと電源を内蔵しています。授業のほか、各種研修や講習会、公開講座などに利用されています。

図書館情報学リカレント教育推進室

図書館情報学関連のリカレント教育を目的とした施設です。20名程度で利用可能です。

メディア制作スタジオ

映像・音声収録のためのスタジオで防音構造になっており、ビデオカメラ、照明設備などがあります。操作室にはノンリニアビデオ編集機など、撮影した素材を作品化する設備があります。

メディア遠隔シミュレーションスタジオ

遠隔教育のシミュレーションを行えるスタジオです。メイン送受信室とサブ送受信室2室の計3室で構成されています。

マルチメディアプラザ、メディアミュージアムは自由に入館して利用できます。2階の施設利用には事前申し込みが必要です。

デジタルメディア部門については図情情報サービス係（内線 8・1220、8・1221）までお問い合わせください。



とひらくす

[学外]

平成14年度第3回国立大学図書館協議会理事会
10月31日(木)東北大学附属図書館2号館会議室
において、東北大学の当番で開催されました。

[報告事項]

事業計画の実施状況について 国立大学図書館
協議会賞受賞者選考委員会報告 国立大学図書館
協議会海外派遣者選考委員会報告 特別委員会等
報告 - 著作権特別委員会報告 図書館高度情報
化特別委員会報告 国際学術コミュニケーション
特別委員会報告 電子ジャーナルタスクフォース
報告 組織問題検討タスクフォース報告 - 各地
区協議会報告 国公立大学図書館協力委員会
日本図書館協会関連報告 その他 - 第5回「法
人格取得問題に関する附属図書館懇談会」報告
国立七大学図書館協議会報告 -

[協議事項]

法人化に伴う対応について - 国立大学協会と
の今後の連携のあり方について 附属図書館の法
的地位について 人事問題に関する制度設計につ
いて 資産評価について 法人化後の附属図書館
間の共通課題について - 今後の国立大学図書館
協議会のあり方について 第50回総会記念事業の
実施について 総会の運営と日程について 国立
情報学研究所の加盟依頼について その他 - 大
学図書館著作権検討委員会への委員の派遣につ
いて 電子ジャーナル・タスクフォースのメンバー
追加について -

第35回関東地区国立大学附属図書館事務(部・
課)長会議

11月13日(水)筑波大学附属図書館2階集会室に
おいて、筑波大学の当番で開催されました。

[報告事項]

平成14年度第3回国立大学図書館協議会理事会
について 他

[協議事項]

図書館が中心となった学内合意形成について
法人化後における附属図書館の事務組織等のあり
方について 平成15年度第50回国立大学図書館協
議会総会に向けた関東地区加盟館の協力体制につ
いて

[承合事項]

法人化に向けての準備作業等について各図書館
の取り組み状況について 国立大学法人化に向け
た各大学における準備状況(承継物品目録・資産
台帳・蔵書点検等)について 学生用図書購入
及び図書資料の整理基準について

[学内]

第249回附属図書館運営委員会(9月開催)

[審議事項]

附属図書館における各種要項等の一部改正につ
いて 平成15年度雑誌購入について 電子ジャー
ナルの利用契約について

[報告事項]

平成14年度研究用人文・社会系基本図書購入に
ついて 平日の貸出時間の拡大について 第49回
国立大学図書館協議会総会について
第250回附属図書館運営委員会(10月開催)

[審議事項]

平成14年度専門委員会委員の選出について 平
成14年度教育図書委員会委員及び平成14年度研究
図書委員会委員の選出について 「専門図書館委
員会の組織に関する細則」の制定について 平成
16年度概算要求について

第251回附属図書館運営委員会(11月開催)

[審議事項]

附属図書館長候補者の選考に係る意見書につ
いて

掲示板

平成14年度附属図書館防災訓練について

11月8日(金)に、中央図書館において防災訓練を実施しました。

中央図書館新館1階雑誌事務室からの出火を想定し、通報・避難誘導訓練を行いました。職員等の参加者全員が筑南消防本部署員の指導で消火器による消火訓練を行いました。

また、体育・芸術図書館では10月30日(水)、医学図書館では12月5日(木)に、図書館情報学図書館では11月22日(金)、東京地区の大塚図書館では11月26日(火)に避難誘導訓練等を行いました。



家庭用消火器での消火訓練

Web版OPAC配架場所案内について

すでに非常に多くの方にご利用を頂いています。Web版のOPACで検索した図書がどこに配架されているか、およその場所を画面上に表示できるようになっています。

OPACの所蔵欄の「所在」にそれぞれリンクが張ってあります。このリンクをクリックすることで、新しくウインドウが開いて地図上に配架場所がハイライトされると同時に説明文が表示されます。

WWWのOPACで検索を行い、以下のような検索結果がでたら、

図書目録情報

書誌

- ◆ 書名 改正建築図説 1-7階層編(1/2) (1/2) (1/2) (1/2) (1/2) (1/2) (1/2)
- ◆ 著者名 高木恒三郎
- ◆ 出版 学研、学研出版社、2000
- ◆ 形態 200
- ◆ 形態 200x210cm
- ◆ 所属地 建築系(1/2)、改正、学研出版社
- ◆ 言語 日本
- ◆ 収録言語 日本語 (ja)
- ◆ 本文言語 日本語 (ja)
- ◆ 著者情報 高木恒三郎 (1/2) (1/2) (1/2) (1/2) (1/2) (1/2) (1/2)
- ◆ 形態 CAL 500冊
- ◆ 形態 CAL 500冊
- ◆ 形態 CAL 500冊
- ◆ 件名 建築 - 図説
- ◆ 番号 NCJ26A4000000
- ◆ 番号 2000CN000000

所蔵

所蔵地	所蔵種別	所蔵形式	所蔵状況	備考
中央図書館	図書	紙	あり	

中央(所在)の部分をクリックすると下の様な画像のウインドウが開きます。



ぜひお試しいただき、ご意見をお寄せいただければ幸いです。

中央図書館については近日中に動画による案内も始まる予定です。

図書館メールサービスの開始について

附属図書館では、電子メールによる次のサービスを開始いたします。

- (1) 延滞本の督促
- (2) 予約本返却通知
- (3) 返却期限の近付いたことのお知らせ
- (4) 図書館のウェブページの「新しい情報」に項目が追加されたことのお知らせ

(1),(2)については学務システムTWINSにメールアドレスが登録してある方または図書館のメールサービスのページからメールアドレスを登録された方が、(3),(4)については図書館のメールサービスのページからメールアドレスを登録された方が対象となります。

サービスの詳細については、

<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/mail-service/>をご覧ください。

公開シンポジウム「電子図書館の軌跡と未来」開催のお知らせ

平成15年1月24日(金)に筑波大学・図書館情報大学統合記念公開シンポジウムを開催します。

「電子図書館の軌跡と未来：ますます広がる図書館サービス」と題して、これからの図書館と電子図書館の進むべき方向を探ります。

招待講演として九州大学副学長・附属図書館長である有川節夫教授と国立情報学研究所の山本毅雄教授をお招きし、最近の電子図書館事情をうかがいます。そのほか一般講演やチュートリアルなども予定しています。

どなたでも歓迎いたしますので、お気軽にご参

加ください。詳しくは以下のURLをご覧ください。
(Webから参加申込みも行えます)

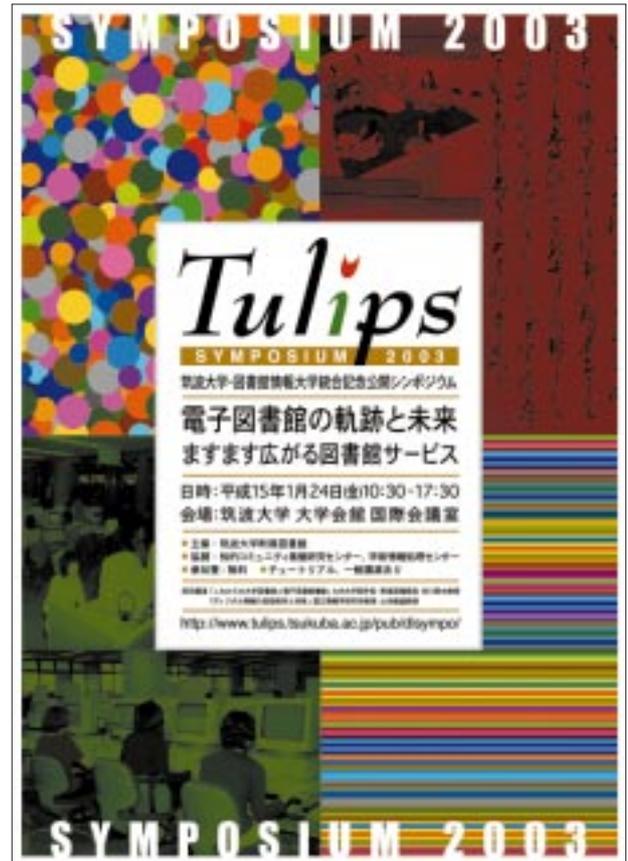
<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/dlsympo/>

日時：平成15年1月24日(金) 10:30 - 17:30

場所：筑波大学大学会館国際会議室

主催：筑波大学附属図書館

協賛：筑波大学知的コミュニティ基盤研究センター、筑波大学学術情報処理センター



電子図書館シンポジウムポスター



編集室だより

統合に伴い、新たな編集委員が加わりました。
情報サービス課：永濱 恵理子